

令和 3 年 6 月 25 日現在

機関番号：32690

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K02119

研究課題名(和文)ヘノロジー概念に基づく形而上学史の構築 哲学史のグランド・セオリーをめざして

研究課題名(英文)Reconstruction of History of Metaphysics based on the concept of Henology

研究代表者

福谷 茂 (Fukutani, Shigeru)

創価大学・文学研究科・教授

研究者番号：30144306

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：ヘノロジー(一者論)という概念に対して独自の定義を下すことによって、近世哲学をその背景と文脈のもとに位置付け直し、それぞれの哲学者の発するメッセージを新しく捉える作業に従事した。得られた成果は西洋近世哲学史を体系的に捉える上でのカント哲学の重要性がヘノロジーの観点からも再確認されたこと、および西洋哲学史の中での「近世」という時代の特徴を古代および中世との対比において明らかにすることができたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義は、ヘノロジーという概念を導入することによって日本発の新哲学史像の可能性を提供したことである。また社会的意義は、ヘノロジー史観が形而上学的な性格のものであることを通して、西洋哲学のみならずインド哲学や中国哲学、大乘仏教に関しても同じ土俵で論じうる可能性を開いたことである。これはヘノロジー史観が近年関心が高まっている世界哲学史のためのツールとして働きうることにほかならない。

研究成果の概要(英文)：By defining the concept of henology, I have engaged to work on the theme of situating modern philosophy newly and bringing out the messages of each great philosophers of this period from this new perspective. Main results are the henological importance of Kantian philosophy for the purpose of grasping the history of the modern philosophy systematically and conceptualizing the distinguishing points of the modern philosophy in comparison with the ancient and the medieval philosophy.

研究分野：カント研究、形而上学研究

キーワード：カント 形而上学 ヘノロジー

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の背景としては、カントの『遺稿』に関して私が進めてきた研究の成果がある。すなわち従来のカント解釈では単に三批判書を中心としたカントの主著群の連続線上に付随的かつきわめてマイナーな位置しか与えられていなかったカントの『遺稿 Opus posthumum』に対して、私の研究はそれがカントの主著群、とりわけ『純粹理性批判』で遂行された思考の最終目的地となるものであり、したがって『純粹理性批判』を解釈するための拠点とすべき文書であることを明らかにした。具体的にいうと、『遺稿』でのカントは主著群での分析的叙述方法を一変させて総合的叙述方法に移っている。そのことによって初めて完成形態に達したカント哲学は「一なる経験」を中心としたホーリスティックな性格の強いものだった。この点を強調するために私はこれまで主として新プラトン派の研究において使用されていたヘノロジー (henology、「一者論」という概念を取り上げ、これを近世哲学史研究のための概念として鍛え上げることによってはじめてカント『遺稿』を正面から捉えられうると考えた。しかしカントと新プラトン派を結びつけることには非常な冒険が伴っている。従来の研究史において内外ともにこのような試みを見出すことはできなかった。Heimsoeth や Max Wundt がカントの形而上学を論じたとしても、それは「ドイツ講壇形而上学」というローカル・ヒストリーにカントを組み込んだに過ぎなかったこれに反してヘノロジー 概念は古代における淵源から言っても、いわば西洋哲学史におけるメインストリームのうちに形而上学者カントを登場させることにほかならない。これは従来のカント像の大修正を要求する成果であったので、研究の次の課題としてこのヘノロジカルなカント像をさらに深化させる必要、あるいは学問的義務が生じてきたと感じた。研究開始当初の背景はこのようなものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は上記のようなヘノロジー において最終形態を得たカント哲学を哲学史の大文脈において位置付けること、これがまず第一の目的である。そして第二に、それによって西洋近世の形而上学史全体を見直すことが目的である。これは結局、デカルト・スピノザ・ライプニッツら近世哲学史上の大哲学者たちをも、カントがその一事例を提供している「ヘノロジー」(一者論) という新しい概念のもとで再検討することにほかならない。ヘノロジーとはオントロジー (存在論) とコントラストをなす形而上学の類型であって、オントロジーが「存在者」という自己完結的な描像を基底に置くものであるのに反し、ヘノロジーは存在者をして存在せしめている根拠を「一」(一者) と存在者との関係に求める点で存在者の存在の根拠を徹底的に「媒介」作用によって捉えようとしている、とみてこれをヘノロジーに関する私の暫定的な定義とした。このように定式化されたヘノロジーを、その最も顕著なケースである新プラトン主義との対比において近世哲学史上の各哲学者に渡って同定することにより、この概念の射程を明らかにすることが研究の目的である。同時に、上にも記したが、このような「一なるもの」と「多」との関係はもっぱらプロティノスやプロクロスに代表される新プラトン主義とこれまで完全に同一視されてきただけに、そのような一面性を脱して、新プラトン主義そのものをも一つのケースとするような概念へとヘノロジー を脱皮させるということもまた副次的な研究目的とならざるを得ないことは言うまでもないことである。

3. 研究の方法

研究の方法は各哲学者においてこのようなヘノロジー的な点に注目している研究書・研究者を探究し収集することを基本として、各哲学者に対してヘノロジーの観点から楔を打ち込むことをとりあえずの方法とした。この方法は上記の各哲学者に関して従来は全く注目されていなかった面を取り上げることによって斬新な成果を得た。すなわち、スピノザに関しては『エティカ』第5部における「第3種の認識」に対してヘノロジカルな照明を当てることで、第5部で説かれる救済論に新しい意義を与えることができた。またライプニッツに関しては創造論というこれまた従来その重要性に比して研究者の関心が薄かったテーマに、ふさわしい位置を与えた形でライプニッツ哲学像を刷新することができた。近世の哲学者たちに続いて、ハイデガーやジェンティーレをはじめとするより現代に近い時代の哲学者たちの解釈に、ヘノロジー概念を投入する試みも行った。ハイデガー(「存在論的差異 die ontologische Differenz」) に関してジェンティーレ(「現実活動主義 actualismo」) に関して、彼らの重要な論点がヘノロジーの観点から理解可能であることを示すことができたと感じている。

4. 研究成果

研究成果としては上述のような研究の方法をとった結果として、ヘノロジー概念が近世哲学史上の大哲学者たちの思考の中に潜在していることが明らかになった。これは彼らの形而上学をいう研究者たちがもっぱら「存在論」こそ形而上学だと考えて貧しい成果しか上げ得なかったのに比して斬新な観点を提示し得たと信じている。ただしエクスプリシットではなくあくまでも潜在している、と言う形態である点にはなほだ興味あるポイントであって、今後の近世哲学史研究上の一つのテーマとする意味があると考えているが、ひとまずは上記のような「一と多」の「媒介」作用の諸相・諸類型としての形而上学=ヘノロジーこそが近世哲学の核心で働いているロジックであることを確信できたことが最大の成果であると考えている。これは各哲学者に関して楔を打ち込むことが各論であるとするならば、いわばヘノロジー原論を構築する作業に属する。同時にまたもう一つの成果として、このようなヘノロジー概念を活用することで西洋哲学以外の思想、具体的には京都学派の西田幾多郎（「場所」に関して）や特に田邊元（「種の論理」に関して）の哲学をも同じ土俵において論ずることができるようになった。彼らの哲学はことさら「東洋」に重心をおいて理解されるべきではなく、むしろ同じヘノロジーにおいて独自の寄与を行ったという点においてこそ、その独創性が認められるべきである、というのがこの点に関する成果である。さらに、インド哲学において「一と多」という問題が原点にあり、大乘仏教（天台と華嚴）においてもまた「一と多」が主要な図式であることを考慮するならば、これらもまたヘノロジー上の位置を持つことは明らかである。すでに西洋哲学史を貫通していることを明らかにしえたヘノロジーは、近年社会的・学界的に関心が高まっている「世界哲学史」に対しても貢献することができるのではないか、というのが今後の展望である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 福谷 茂	4. 巻 9
2. 論文標題 書海按針	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Prolegomena	6. 最初と最後の頁 9-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/241368	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 3件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 福谷 茂
2. 発表標題 カントにおける経験と理性
3. 学会等名 日本カント協会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 福谷 茂
2. 発表標題 ヘノロジーとはなにか
3. 学会等名 京大中世哲学史研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 福谷 茂
2. 発表標題 ヘノロジーとはなにか 新プラトン主義と近世哲学とをつなぐもの
3. 学会等名 新プラトン主義協会（招待講演）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 アドリアーノ・プロスペリ	4. 発行年 2017年
2. 出版社 知泉書館	5. 総ページ数 284
3. 書名 トレント公会議	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------